常照
第７９１号

親鸞を信じ切れるか？

「歎異抄」に「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、善きひとの仰せを蒙りて信ずるほかに別の子細なきなり」とある。

この意味は、「親鸞にとっては、往生の要は、善知識が、唯、念仏して弥陀におたすけいただきなさいとのお言葉をそのまま信ずること、それが全てなのです」である。

たすけられる対象は、「十方衆生」と大経にある。全ての生きとし生けるものであるが、人間ひとりひとりが、その対象となる。

親鸞聖人の御述懐に、「弥陀の五劫思惟の願をよく考えてみると、それは、ただ親鸞一人をたすけようとのためである。だから、たくさんの悪業をかかえているこの親鸞を助けようと、思い立って下さった本願のおそれおおいことであることよ」とある。この御述懐は、おそれおおいことに、親鸞聖人ご自身を引きあいに出して、我々の身の罪悪の深さをも知らず、如来の御恩の高いことも知らないで迷っている我々にそのことを知らせようとの弥陀の願いであったのだ。と歎異抄にある。

たすかる対象は「十方衆生」。これは、

拡散的なことばであるから、自らのこととする心象は、薄められる形となる。「十方衆生」は自分であるどころか、自分以外の誰かと考える畏れがあるとして、「十方衆生」は、ひとり親鸞であるという我らへのおさとしでもあった。

全てが一人、一人が全てである。一人がたすからなければ、全ての「十方衆生」はたすからないということである。

無慚無愧

「そくばくの業を持ちける」凡夫なる親鸞。御自らを、悲歎述懐されておられる。聖人の八十八才に加筆、増補の筆跡がある「正像末和讃」に、「愚禿悲歎述懐」十六首が記載されている。そこには、聖人の御自らを歎き悲しむ声が心に染み透ってくる。そのうちの一つ

悪性さらにやめがたし
こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに
虚仮の行とぞ名づけたる

また、欄外の最後の一首

是非しらず邪正もわかぬ
この身なり
小慈小悲もなけれども
名利に人師をこのむなり

悪心をとどめることなど全く無理でその心は、へびやさそりの毒のようで、他を苦しめずにはおかない、無明の中にあるこの身、それ故に、物事の是非、邪しまさも正しさも、分別がつかない。また、他人の悲しみに寄り添い、悲しむ心もないのだ。それなのに、さらに、名誉と財

産を得るために、人の上に、立ちたがるのである。まことに浅ましい自分である。無慚無愧の恥知らずのこの身であると歎かれておられる。ならばたすかる手立ては何であろうか？

善き人（善知識）への深い帰依

それは、善き人の化導（けどう）である。浄土真宗においては、善知識の存在があってこそ、真実信心を得るのである。自力の行は無効であるから、往生の道を知っている善き人に尋ねることの外ないのだ。

親鸞聖人の善き人は、源空（法然）上人である。「高僧和讃」にその出遇いの一首がある。

曠劫多生（こうごうたしょう）のあいだにも
出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずは
このたびむなしくすぎなまし

法然上人（源空）に対する絶対的に帰依する親鸞聖人のあり方はこうである。

歎異抄に「たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」。また「恵信尼文書」に「上人（法然）のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも」。また執持鈔にも「故上人（法然）のおおせに『源空があらんところへ行かんと思わるべし』とたしかに承りしうえは、たとい地獄なりとも故上人のわ

たらせ給うところへまいるべしと思うなり。この度、もし善知識にあいたてまつらずは、我ら凡夫、必ず地獄におつべし」と。

法然への絶対帰依と法統

この様に、法然上人の教えに二心なく疑いない親鸞聖人であったが、決して妄信では、なかったのである。親鸞聖人は、「釈尊の説教、善導の解釈が、まことならば、法然の仰せも又正しい」。釈尊からはもとより聖徳太子七高僧、諸々の善知識の説く正統な法脈を継ぐ法然上人の教えに親鸞聖人は、絶対帰依をなさった。

親鸞聖人の教えを聞く者に求められることは、「親鸞を信じきること」ではなかろうか。

十二月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期　十二月七日(土)～十一日(水)
大阪教区 石川南組 専光寺
講師　多田大樹師

○後期　十二月十三日(金)～十六日(月)
北海道教区 後志組 明善寺
講師　鹿谷賢純師

○場所　小樽別院内

○時間　午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞にご来院くださいますよう、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話　(〇一三四)二二一〇七四四番
FAX　二九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一六一六番